

が、デラックスなものがなく、いずれも内容を見せるという展示本来の姿に戻ったことは喜ばしいことであつた。展示の討論は第3日昼食時に展示物を前にしながら出展者と質問者が一対一で討論する形式をとつた。出展者は一時間半食事ぬきで立つていなければならず、また他の展示への討論に出かけられないという

不便はあつたものの、この時間展示会場は非常な盛況であつた。また展示物の前に机と椅子を置き、質問用紙と余分の資料を置くようにしたこと、展示物を写真にとつて予約者に配布するようにしたことも好評であつた。電頭写真は勿論、他の分野でも細かいテクニックやデータを示す場合、短時間にスライドで見せるよ

りも展示で見せた方が理解しやすく、その意味で学術展示は将来大いに活用すべき発表形式のように思われる。ただ説明があまりに簡単で理解出来ないような展示物のあつたこと、討論時間に発表責任者のいないところがあつたこと等は今回の展示が好評であつただけに一寸残念であつた。

総合医学賞（皮膚科）の銓衡について

1月における本誌編集会議は、25日に東京都文京区本郷の医学書院本社で午後6時から開かれた。本誌の編集のほかに、総合医学賞授与皮膚科論文の銓衡も行なうことが、以前から本誌編集同人に知らされていたので、この同人4名、すなわち旗野・橋本・佐藤の3教授とわたくしとは、昭和48年に発行された“臨床皮膚科”1~12号に掲載された綜説と原著とを、あらかじめ調べておいて集つたわけである。

いよいよ銓衡会議が始まると、どんな形式で会議を進行させるかが、まず問題となつたが、結局4名の各人がこれらと思う論文の題名と著者名とを紙片に書いて提出し、最高の投票数を得た論文を授賞の対象とすることにきまつた。各投票者は、ひとり好きな数だけ投票したので、全部を合わせると、10篇を超える論文が候補にのぼつた。

もちろん原著が大部分であつた

が、中には綜説もまじつていた。しかし綜説では、自他の既報論文を手ぎわよく排列しただけになり、これを授賞の対象とするのは、どうかと思うといい出した同人もあつた。この意見は皆の同意するところとなり、やはり綜説はやめにして、原著の中から選ぶときまつた。

ところが大部分の原著は1票だけしかなく、その論文を選んだ理由をその投票者が説明したが、皆の納得するところとはならなかつた。最高の票数は2票で、それ以上を得た論文はまつたくなかつた。

2票の投じられた原著は2篇あり、一つは露木重明氏・伊藤文子氏の“線状苔癬について”（本誌：27；493）、他は吉川博文氏・三島豊氏の“老人性白毛における色素脱失機序の電頭の研究”（本誌：27；525）であつた。この2篇の内容については、4名の同人の間で活発な討議が行なわれた。

吉川・三島両氏の論文は、生理的老年性白毛という特殊の材料を用いて、メラニン生成障害過程に新知見を見いだした良い研究であるとの意見が強かつた。しかし露木・伊藤両氏の論文については、線状苔癬は比較的ざらに見られる皮膚病で、従来は見過ごされてしまうことが多いが、その多数例を丹念に観察し、本邦における本症にまとめを付けたのは、りつばな仕事であると皆が賛同した。その上、本誌が“臨床皮膚科”と称する名を持つて、臨床という点を重視していることを顧慮すると、この論文を採択するのがよいのではないかとの意見が、同人一同のいれるところとなつた。

こういういきさつから、昭和48年度に本誌に掲載された原著のうち、露木・伊藤両氏の“線状苔癬について”が、総合医学賞の皮膚科の部に選ばれることになつたのである。

（高橋吉定）